

博士論文審査及び学力の確認の結果

審査委員（主査） 林 和宏



学位申請者 原 基晶

論文名 ダンテ『神曲』と個人の出現

本論文の審査委員会は、学外から和田忠彦本学名誉教授、本学から岩崎務教授、沼野恭子教授、千葉敏之教授、林和宏准教授（主査）の5名で構成され、本学において2018年10月19日に開催された公開審査を経て、全員一致して、論文および学力を高く評価し、博士（学術）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

【論文の概要】

本論文「ダンテ『神曲』と個人の出現」は、『神曲』に見られる西洋文学史において画期的な現実描写をダンテに可能にさせた根本的な理由を中心主題として論究した研究であり、構成は以下の通りである。

- 第一章 ダンテ批評史
- 第二章 フランチェスカ・ダ・リミニとダンテをめぐる研究史
- 第三章 失われた自筆原稿を求めて
- 第四章 預言する詩人ダンテ
- 第五章 『神曲』と個人の出現——ダンテの煉獄と都市社会
- 第六章 ベアトリーチェの微笑
- 終章 結論

第一章は、今日まで数世紀に及ぶダンテ研究の歴史を検証し、そこに内在する問題点として、近代におけるダンテ批評の政治性を鋭く指摘する。19世紀の国民国家イタリアの誕生にダンテおよび『神曲』の再評価は深く結びついており、それ以降、『神曲』はイタリアの国民文学として位置づけられてきたことが論証される。しかし、ダンテがイタリア統一以前に生きたという事実ひとつをとっても、『神曲』を単純に「イタリア文学」の範疇で扱うことは問題であり、本論文はその点に留意することが言明される。

第二章は、『神曲』解釈の鍵を握る主人公ダンテをめぐる問題を検討するために、「地獄篇」第五歌に描かれるフランチェスカ・ダ・リミニとダンテの出会いのエピソードを取り上

げる。作者ダンテと主人公ダンテを同一視して、このドラマティックな出会いの場面に人間存在の真実の姿を読み取ったデ・サンクティスに代表されるロマン主義的読解は、作者と登場人物の区別の必要を説く歴史主義的批評に取って代われ、『神曲』の物語の中に詩論が読み解かれるにまで至った、近現代の研究史がたどられる。しかし、ブルクハルトを驚かせた、ダンテにおいて初めて人間の表現が成し遂げられたという事実に対して、いまだ解答が与えられていないことが指摘される。

第三章は、『神曲』の冒頭3行の分析を通して登場人物ダンテと作者ダンテの関係を考察するための準備として、いくつものヴァリエーションが存在するために読みが不安定なこの冒頭3行のテキストを検証する。現代の教種類の『神曲』原文に邦訳と英訳も加えて比較を行ない、(依拠した)本文の異なりとそれに伴う解釈の違いを、インクynaブラや最初期の写本にまで遡って考察し、問題箇所については14世紀のヤコポ・アリギエリの解釈を受け継いだイングレーゼ版が適切であると結論する。

第四章は、ダンテ青年期の自伝的作品とみなされがちな『新生』が一種の聖者伝として解釈される点を確認した後、『神曲』冒頭3行の分析を進め、主人公ダンテの彼岸の旅が神慮に基づくことを示すためにダンテはキリストになぞらえられていること、さらには地上に救いの道を説く「預言する詩人」として創造されていることを明らかにする。

第五章は、主人公ダンテがそのようにフィクションとして理解されるとき、『神曲』を特徴づける現実描写、そのリアリズムは何からもたらされるのかと問い、アウエルバッハの予型論による説明に疑問を呈し、同時代とそれ以前を明確に区別するダンテ自身の歴史意識からもたらされたと主張する。ダンテの生きた時代は封建制社会から商業中心の都市社会への過渡期にあたっており、タイプとしての人生を生きる古い社会に代わって、多種多様な職業に従事する市民が個々の人生を生きる都市が勃興し、小金融業者の家に生まれたダンテはこの都市社会の現実を目の当たりにしたはずであり、『神曲』の現実描写は、この商業革命下の多様な都市住民の多様な人生を描く必要から生まれたとの結論に達する。さらに、封建制化の騎士の文化と異なり、貿易に支えられる都市商人にとっては都市間の平和が必須であり、そのため世界平和が『神曲』の基本理念に据えられていることが論じられる。

第六章は、世界平和をめぐるダンテの考えを政治的著作『帝政論』および『神曲』の中から探り出す。ダンテによれば、自由な状態に置かれているならば人間は必ず神を志向し、そして人類全体が平和であるならば、個々人の資質が完全に開花し、人類は神へ近づく。そしてこの世界平和の実現には文化的相違を乗り越える人間相互の理解可能性が前提とされ、その可能性は、人間を人間たらしめる本質であるところの魂が、共通の知性的な霊として神から与えられている点に求められる。このようなダンテの思想が、『神曲』の至るところで、神の愛としての神的光線と神への愛としての反射光の関係に表現されていることが明らかにされ、締めくくりに、冒頭3行目の「まっすぐに続く道」は、神の光の反射光として

の人類が歩む神への道を示すものであり、ダンテはこの反射光をたどり、彼自身がその光線となって最後に神の許に戻った、という解釈が示される。

終章は本論文の中心主題に関わる個人という概念を軸にして本論文の議論をたどり整理したものである。

【審査の概要】

公開審査は2018年10月19日16時15分より2時間余りにわたって開催された。はじめに原基晶氏より本論文の意図と概要の説明を受けた後、各審査委員からの講評と質疑応答が行なわれた。

本論文が高く評価されるのは主に以下の点である。

中世キリスト教世界観の完成者としてのダンテ像が一般的な見方であるのに対し、本論文は、個人を個人として描く画期的な現実描写が生まれた理由を追究することにより、逆に新しい時代の幕開けとなる思想の持主としてのダンテ像を提示している。と同時に、19世紀の国家統一運動期以降に創り出された、国民国家イタリアの国民文学としての『神曲』像をも脱却し乗り越えている。さらに、個人、平和といったきわめて今日的な問題を読み込むことによってダンテと現代を新たに繋ごうとしている。

ダンテ研究史の綿密かつ批判的な検証が充実していて意義深い。この検証によって国民文学としての『神曲』像の政治性を明らかにし、また本論文の果たすべき役割を相対的に位置づけることができている。ダンテをめぐる登場人物と作者の関係についても、批評史の検証を踏まえて自らの議論の相対的な位置づけができおり、両者の腑分けあるいは統合をめぐる考察も興味深いものになっている。

テキストをめぐる議論において、ダンテは宮廷の人々の前で自ら注釈しながら作品を発表していったと指摘するなど、当時の具体的な状況に目が届いている。同様に、予型論やアレゴリーに関する議論を通して、ダンテが中世の人間であることが十分に踏まえられている。

本論文は、これに先立って発表された『神曲』の全訳（講談社学術文庫、2014年）と補完し合って原氏のダンテ研究を形作るものであり、翻訳の過程で得られた数多の解釈や知見によって議論が支えられている。わが国におけるダンテ研究の一段高いレベルの礎石を築くことを本論文において意図したと自ら述べているが、『神曲』研究が広範な分野に及ぶことを反映するように、文献学から神学、政治、経済にまで至る広い視野の中で議論が展開されている。

他方、問題点としては次のようなものが挙げられる。ただし多くは、欠陥というよりも議論をさらに深める契機になると考えられるものである。

重要な個別のテキスト解釈に関するものとして、ヤコポ・アリギエリの説に従った冒頭3行目のcheについて、採用した解釈とは異なると受け取られかねない説明が終章でなされている。同じく「地獄篇」第10歌の重要な1行についての解釈がやや強引に思われる。新解釈であるならばそれに見合った提示の仕方をするべきであるが、従来の解釈への言及がなされていない。

現実描写を何がダンテにもたらしたかという議論において、アウエルバッハの予型論を退ける理由は、予型論の定義が『神曲』にあてはまらないからだとされる。しかし、このような門前払い的な理由であるならば、なぜ予型論を問題にしたのか疑問なしとしない。

『神曲』には普通の市民が描かれていると述べられるが、読者にとって印象深い登場人物は、本論文にも取り上げられている、フランチェスカやカヴァルカンテといった貴族、それにギリシャ神話の英雄ウリッセたちである。多様な都市住民の個性が描かれている具体例をもっと豊富にかつ印象深く挙げる必要がある。関連して、個人を問題にするとき、ダンテ個人を指す場合と、個々の普通の市民を指す場合があり、区別されているのかどうか曖昧である。

ほかにも多くの質疑が、本論文の議論に直接関係する事柄だけでなく、本論文の周縁あるいは基底に存在する問題をめぐっても投げかけられた。それに対する原氏の能う限り誠実な応答はダンテ研究者としての高い学識に裏打ちされたものであった。